近代哲学思想史

大陸合理論 VS イギリス経験論

あらゆる学問を支配し、これを否定することも、疑問を持つことも許されなかったカトリック教会の教えが、ガラガラと音を立てて崩れ落ちたのが、宗教改革と科学革命の時代です。

『方法序説』で**合理論**を唱えたフランスの**デカルト**は、関数を x 軸 y 軸で表すことを考案した**数学者**です。フランス軍の一兵士として三十年戦争を戦った彼は、カトリックにもルターにもカルヴァンにも疑問を持ち、すべての思想を疑いました。すべてを疑った上で、その疑っている自分の理性というものが存在する（**我思う、ゆえに我あり**）、**理性を使って数学的に証明できること**は、（たとえ聖書に書いてないことでも）すべて正しい、という**演繹**えんえき**法**を説きました。判断の基準を、神（聖書）ではなく、人間の理性においたのです。

デカルト

F.ベーコン

フランシス=ベーコンは、イギリス王ジェームズ１世に仕える法律家でした。裁判では、証拠を集めて事件を立証しなければなりません。**経験（実験）しなければ真理に到達できない**という**経験論**です。まず、具体的データを集積し、そこから一定の法則を導く。これが**帰納**きのう**法**です。彼が書いた『新オルガヌム』という本は、アリストテレスの著書である『オルガヌム』を意識してタイトルがつけられました。なお、中世末期に唯名論の神学者でロジャー=ベーコンという人がいますので、区別をするためにフランシス、またはF. をつけてください。

たとえば「宇宙人が存在するか？」というテーマに対し、「宇宙には地球と同じような条件の惑星が存在しうる。そこでも生命が発生し、知的な生命体が生まれ、宇宙に進出し、地球にも来ている可能性がある。その確率は…」と推論を重ねて結論に至るのがデカルトの観念論。一方、「宇宙人を捕まえて来い。UFOを捕獲しろ。証拠がなければダメだ」というのがF. ベーコンの経験論。ここにも、ヨーロッパの二大思想の対立が見えますね。アタマだけで真理を求めるプラトンの思想と、実際のモノを見て、触って…というアリストテレスの思想です。

ドイツ観念論

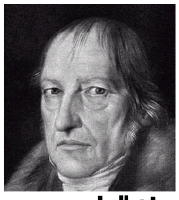
ドイツ（プロイセン）の**カント**は、人間の理性を純粋理性（経験から真理を求める力）と、実践理性（道徳性）とに分けて考えました。自然界の探求には経験に基づく純粋理性で間に合うが、「人間はいかに生きるべきか」、というような深い問題は、実験するわけにはいかない。「人を殺すのは正しいか」という問に対して、「じゃあ、試しに殺してみよう」というわけにはいけない。実験しなくても（先験的に）、「人殺しは悪だ」と理性でわかる。だから、純粋理性には限界があるんだ…これがカントの**『純粋理性批判』**です。

カントが生きた時代はフランス革命の時代です。全ヨーロッパを巻き込む革命戦争の勃発を見たカントは、**『永久平和のために』**を著し、のちの国際連盟のような平和機関の設立を訴えました。

このあと、ナポレオンがヨーロッパを征服しました。「自由」「人権」を掲げるフランス軍の占領下におか

れたドイツの知識人は、大きな衝撃を受けます。**ヘーゲル**もその一人でした。彼は、「絶対主義から民主主義へという世界史の発展は、逆戻りできない」、このように、「**人間の精神（理性）は、歴史的に進歩・発展してきた**ものなのだ」と考えました。

たとえば古代ギリシアにおいては、奴隷制の存在は「当たり前」でした。プラトンもアリストテレスも、「奴隷の人権を守れ！」なんて一言も言ってません。その後、理性の進歩によって「奴隷制はなくすべきだ」という考えが生まれ、奴隷制存続論と廃止論が対立し、ついには廃止論が多数派となって、社会が変わる。意見の対立が解消されて、新たな社会へと移行する。このように、**理性は一直線にではなく、ジグザグに進歩してきた**。ヘーゲルのこのような歴史観を**弁証法**といいます。


ヘーゲル

マルクス

ベンサム

マルクス主義

プロイセン領ラインラントのユダヤ人の家系に生まれた**マルクス**は、ヘーゲルから弁証法を、フォイエルバッハから「存在するのは物質だけだ」という**唯物論**を学び、両者を合体させて、**唯物史観**を唱えました。ヘーゲルは「精神（理性）がジグザグに進歩する」と言ったのですが、マルクスは「精神なんかどうでもいい。人間がどうやって食い物を作ってきたかが問題だ、**生産力の進歩**と**生産様式**（奴隷制・農奴制・資本主義…）が歴史を動かした」と考えました。

この、**古代奴隷制・中世農奴制・近代資本主義**…という時代区分の方法は、現代の歴史の教科書でも使われています。日本の歴史学者たちは、平安時代が古代奴隷制か中世封建制かなどという不毛な議論を繰り返してきました。ヨーロッパの歴史区分を日本史に当てはめるのがそもそも間違っているのですが、日本の歴史学会ではマルクスの唯物史観がいまだに「科学的歴史学」だと信じられているようです。

功利主義

ドイツ観念論の問題点は、人間の生き方に関することは、実践理性（道徳観）を働かせば、必ず正しい判断ができる、としている点です。では、Aさんの道徳観とBさんの道徳観が違った場合にはどうするのか？　たとえば、臓器移植の問題。重い心臓病の患者に、生きた心臓を移植すれば、命が助かる。しかし、生きた人間から心臓を抜くことはできないので、事故で脳死状態（脳波は停止しているが、心臓は動いている、「植物人間」の状態）の人から心臓を抜く（つまり「殺す」）ことは正しいか？　Aさんは「脳死者は死んでいるのだから、心臓を抜いても殺人にはならない」と考え、Bさんは「脳死者も意識が戻る可能性があるので生きている。心臓を抜けば殺人になる」と考える。こういう場合、どちらの実践理性を優先するのか？

「それは、多数決しかない」といったのが、イギリスの**ベンサム**です。もともと、人間の理性なんて当てにならないもので、人それぞれ判断が異なるのは仕方がない。話がまとまらなければ、投票で決めるしかないのだ。「**最大多数の最大幸福**」が実現できればいいじゃないか。この考え方を**功利主義**といいます。そのためには、できるだけ多くの人が、多数決に加わる必要がありますから、選挙権の拡大が不可欠になります。ベンサムは、**第一回選挙法改正(1832)**の実現に努力し、弟子の**J. S. ミル**は、イギリス自由主義を賛美した『自由論』を書きました。

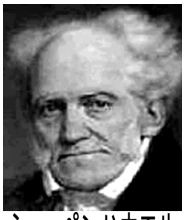
功利主義は、古代ギリシアのプロタゴラスが唱えた「人間は万物の尺度」という考え方とつながります。世界共通の真理なんか存在しない、民主主義、多数決で決めたことを正しいとするしかない、という考え。これを衆愚政治だと批判したのが、ソクラテス・プラトン…ずう一っと続いてデカルト、カント、ヘーゲルとなるわけです。

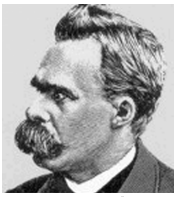
現代の哲学

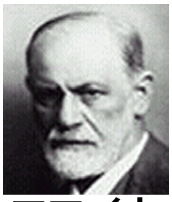
実存主義

ベンサムとは逆の方向からヘーゲル批判をしたのが**ショーペンハウエル**です。ダンチヒの裕福な商家に生まれた彼は、物質的には何不自由ない暮らしをしながら、精神的には苦しみ続けました。父親が自殺。祖母は精神病。母親ともうまくいかず、家族は崩壊状態。人間は、飯を食うだけでは幸せにはなれない。豊かさの中の不幸というものがある。こういう悩みは、飯を食うことで精一杯だったマルクスには、理解できなかったでしょう。

ヘーゲルは、理性が進歩を続けて人類は解放されるという明るい未来を描きました。ショーペンハウエルは、理性なんて何の力もない。人間は結局、どろどろした感情に支配された動物で、永久に苦しみ続けるのだ、という暗い**厭世**えんせい**哲学**（ペシミズム）を唱えました。デカルト以来の理性万能主義を疑うショーペンハウエルが最後にたどりついたのは、**古代インドのウパニシャッド哲学**でした。輪廻転生りんねてんしょうを繰り返す個人の魂（アートマン）は、宇宙原理（ブラフマン）の一部に過ぎないという教え。人間を支配するこの巨大な力を、ショーパンハウエルは「盲目的な意志」と呼びました。彼の思想は当時のヨーロッパではまったく理解されず、「ただの変人」とみなされて、孤独の生涯を終えました。


ショーペンハウエル


ニーチェ


フロイト

デンマークの**キルケゴール**も、理性では説明のつかない悩みを抱えて生きた人です。彼は母親を病気で亡くし、父は家政婦と再婚。そのあと兄弟姉妹が事故や病気で次々に死亡。父が死ぬ間際に、キルコゲールを呼んでいいました。「前の母さんが死ぬ前から、俺は今の母さんと密通していた。この罪が、我が家の災いを招いたのだ。お前も、30歳前に死ぬ…」。とんでもない父親ですが、キルケゴールはこの父の「予言」に苦しみ続けました。30歳の誕生日は無事に迎えましたが、40代の前半で、路上で倒れて謎の死を遂げます。

キルケゴールは、理性と感情をひっくるめた全体を**実存**じっそんと名づけた人で、**実存主義**の祖といわれます。そして彼は、実存を救うのは理性ではなく信仰、キリスト教しかない、と考えました。しかし当時のデンマークの聖職者は、いまの日本の仏教の坊主と同じで、人々の魂を救うよりは金儲けに専念。フランス革命以来、無神論も広まっていたヨーロッパで、キリスト教が本当に救いになるのか？

いや、「**神は死んだ**」と宣言したのがドイツの**ニーチェ**。現代人の魂をキリスト教は救えない。理性も感情も超えた神のごとき強力な意志を持った人間、**超人**が人類を救う。古代ペルシアの預言者ゾロアスター（ツァラトゥストラ）が人々に語るという形式で、この超人思想を展開したのが、『ツァラトゥストラはこう語った』。しかしニーチェ本人は、超人になれぬまま、精神病を発病します。信仰を失った19世紀のヨーロッパ人は精神的に不安定になり、精神病も多発しました。実存主義の哲学者の多くは、精神疾患を抱え

ていました。

ドイツの**シュペングラー**は**『西洋の没落』**の中で、文明には春夏秋冬があり、西洋文明は冬の時代に入った。神に代わる指導者を求める大衆の声に答えて、やがて強力な独裁者が出現し、ヨーロッパは大戦争に突入する、と警告。これは、第一次世界大戦と、ファシズムの到来を予言した書として、有名です。

神を失った20世紀型の新しい人間像を、ナチズムの中に見出したのがドイツの**ハイデッガー**。彼はナチス党員でもあり、ドイツ敗戦後、大学教授の職を追われました。一方、フランスの**サルトル**は、共産主義の中に希望を見出します。しかしスターリンの恐怖政治、ソ連軍のチェコ侵攻を見た彼は、共産主義にも絶望しました。フランスの**レヴィ=ストロース**は、未開人の社会や神話を研究して、人間社会の基本構造を知ろうとする**構造主義**を確立し、**文化人類学**を理論化。現代の哲学は、この構造主義を批判的に継承するポスト構造主義の段階です。

オーストリアのユダヤ系精神科医であった**フロイト**は、実際に患者と向き合う立場から、人間には意識の下に、**無意識**（本人も気付かない衝動、欲望）の層があること、精神的な原因で肉体に障害が表れる神経症という病気の治療には、無意識に働きかける催眠術や暗示が有効であることを確信します。逆に、夢の分析や、自由連想法（心に思いついたことをすべて話す）を用いて、患者の無意識を探ろうとする**精神分析学**を創始。晩年はナチスの迫害を避けて、イギリスに亡命しました。フロイトの影響は芸術にも及び、チェコの作家カフカの不条理文学、スペインの画家**ダリ**の超現実主義を生みました。

▲ ダリ「内乱の予感」

（070824 更新）